

テレビ部門



❖テレビ部門・大賞

毎日放送 映像'17「教育と愛国～教科書でいま何が起きているのか」
道徳や歴史の教科書の採用をめぐる舞台裏、教育現場にかかる圧力の
実態を、忸怩のない正面からの取材で明らかにした。「子どもたちのた
めに日々奮闘する先生方が、ここ数年息苦しさを訴えられていて、教育
現場で何が起きているのだらうという問題意識から取材を始めました。
その結果「反日」といった言葉が、いつのまにか私たちの暮らしの奥のと

ころまで来ているということを痛感しました」(報道局ニュースセンター番
組部ディレクター・齊加尚代さん)。その後登壇したプロデューサーの澤
田隆三さんは、齊加さんを評して「突破力が凄い。一見何の毒もなさそ
うなんですが、実は猛毒の持ち主なんです(笑)。一度噛みついたら、相
手が誰であろうと離さない」と話した。毎日放送のギャラクシー賞テレビ
部門大賞受賞は初の快挙となった。

❖テレビ部門・優秀賞



日本放送協会 NHKスペシャル「スクープ
ドキュメント 沖縄と核」 沖縄における米軍
の核兵器の存在を詳細に追った。「日本を核
で守ってきたという誇りから話してくれる方が
多かったことが印象的でした」(NHK 沖縄放
送局ディレクター・松岡哲平さん)



TBSテレビ 金曜ドラマ「アンナチュラル」
不自然死をとげた遺体と向き合う法医学者によ
る奥深いストーリー。「脚本の野木亜紀子さ
んが、取材で得た情報をサスペンスに落とし
込んでくれました」(ドリマックス・テレビジョン
プロデューサー・新井順子さん)

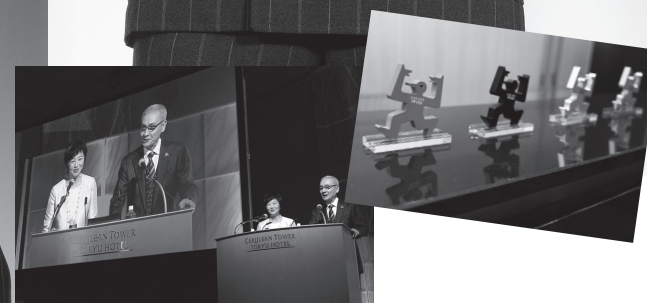


日本放送協会「100分 de メディア論」 4
人の識者が選んだメディア論の古典を読み解
き、議論する。そのタイムリー性と切り口の鮮
やかさ。「いかにわかりやすく料理するかが、私
に託されたミッションでした」(テレコムスタッフ
ディレクター・羽根井信英さん)



55th GALAXY AWARDS ギャラクシー賞 贈賞式

第55回ギャラクシー賞贈賞式が5月31日、
東京・渋谷のセルリアンタワー東急ホテルボ
ールルームにて開催された。総入場者数は
約650名 特に報道各社の取材は過去最
多となった前年をさらに上回った。審査対
象作品は、テレビ部門、ラジオ部門、CM
部門、報道活動部門の4部門合計で774
本。当日は各部門の入賞作品のなかから
「優秀賞」、「大賞」作品を発表した。さ
らにテレビ部門「個人賞」「特別賞」「プロ
ンティア賞」「ラジオ部門「DJパーソナリ
ティ賞」、そして「マイベストTV賞」「志賀信
夫賞」「ギャラクシー賞55周年記念賞」の
表彰も行った。



贈賞式の司会を務めたのは久米宏さんと小宮悦子さん。テレビ朝日「ニ
ュースステーション」の名コンビが復活した。放送当時のオープニングテ
ーマとともに登場、久米さんは「二人で並んで仕事するのは20年ぶり
ですけど、オバケが出てきたと思わないように」と、冒頭のあいさつで早
くも「久米節」を披露し、会場の空気をグッと掴んだ。その後も二人の息
はピッタリ。

ラジオ部門

❖ラジオ部門・DJパーソナリティ賞 村山仁志



「あさかラ!」(長崎放送) パーソナリティ 約20年にわたり生ワイド番組を担当、小説家としての一面も持つ多才な村山さん。「賞をいただけると聞いて最初はドキリかと思いましたが……番組関係者はもとより、私をいつも支えてくれる妻と娘に感謝します」。ずっと憧れの存在だったという久米さんからの問いかけに応え、被爆都市・長崎への思いも語った。

❖ラジオ部門・大賞



CBCラジオ「最期への覚悟」 高齢化社会を迎え、終末医療という課題に正面から向き合った作品。「在宅医療に取り組む医師・杉本由佳さんと出会い、取材を申し込むと『テレビはイヤだけど、ラジオならいいよ』と。自分の想像力のなかで物語を広げられるラジオの特性が活かせたと思います」(制作部 副部長・菅野光太郎さん)



❖ラジオ部門・優秀賞



静岡放送 SBSラジオギャラリー「幸せのカタチ〜本当の親子 本物の親子〜」 里親制度というテーマに迫った作品。「辛抱強く粘るうちに、顔が出ないラジオだからと取材に応えてくれる方が増えました」(編成業務局アナウンス部・原田亜弥子さん)



中国放送 新里カオリのうららか日曜日〜被爆72年「戦後」はいつまで続くのか〜 「毎年8月6日にやっている企画ですが、今年は爆心地を歩きながら『今は戦後なのか、あるいは戦前なのか』という視点を込めました」(ラジオ制作部プロデューサー・笠間英紀さん)



朝日放送ラジオ ラジオと童謡と〜「サッチャー」の阪田寛夫が残したもの 元ラジオ制作者で童謡『サッチャー』を作詞した詩人の思いを描いた。「阪田さんや私の直属の先輩が残した音源を紡ぐことができて幸せでした」(プロデューサー・橋本祐子さん)

テレビ部門

❖テレビ部門・個人賞 高橋一生



大河ドラマ「おんな城主 直虎」(NHK)、「民衆の敵」(フジテレビ)、連続テレビ小説「わろてんか」(NHK)の演技 まさに八面六臂の活躍。「このところ急激に周りが変わってきたという実感はありますよね?」など、久米さんから繰り出される直球&変化球の質問に対して、真摯に答える高橋さん。久米さんが小宮さんに質問の機会を振ると、「私はおそばにいられるだけで十分です」。会場内が笑いに包まれた。贈賞式後には、高橋さん本人から、「常に放送作品と向き合っている放送批評懇談会の方々にこうした形で評価をいただいたのは、とても意義のあることだと思っています。この1年半、一緒にさせていただいた作品のスタッフ、キャストの方々は、志を持って作品に臨み、作品が面白いものになると信じていらっしゃいました。その気概に僕自身が触発されて、この賞をいただけたんだと思っています」とのコメントが寄せられた。

❖テレビ部門・フロンティア賞



AbemaTV「72時間ホンネテレビ」 稲垣吾郎、草薙剛、香取慎吾が72時間の生配信バラエティに挑戦した話題作。今後のネットテレビの可能性を印象つけた。「インパクトのあることをやりたかった」とAbemaTV社長の藤田晋さん。一緒に登壇した香取慎吾さんは、「72時間もあったので、なんでもありで、楽しかったです」とコメント。その後「SMAPは解散したんですけど、まだ世間にSMAPはある。そんな妙な感覚に慣れました?」という、久米さんからの“直球”の質問に困惑しつつも、「何カ月か前だったら“あたふた”したんですけど、今は“あた”くらいなので」と、当之无愧な受け答えは、会場を大いに沸かせた。



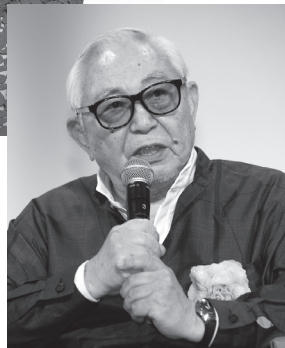
ギャラクシー賞55周年記念賞

倉本 聡 脚本家



ギャラクシー賞55年の節目に際し、放送の発展に寄与した個人を特別表彰する「記念賞」は、倉本聡さんに。2017年はシニア層向けの帯ドラマ枠を自ら企画し、その第1弾「やすらぎの郷」が大きな話題を呼んだ。当日は車いすでの登壇となった倉本さんだが、「テレビを書き始めて60年。先輩たちに教わったのは、テレビは

茶の間に入っていきものだ、だから騒がしく入ってはいけない、そのうえで言いたいことを激しく言う技術を培ってきたつもりです。表彰されるなんて面映いというか、光栄すぎることです」と、笑顔で話した。ゲストとして、倉本作品の常連である女優、風吹ジュンさんと清野菜名さんが登場すると会場が一気に華やいた。



懇親会

贈賞式後の懇親会は、例年通り同ホテル内の会場にて民放、NHK、制作会社、広告主企業、広告会社、そしてギャラクシー賞の運営に携わった放送批評懇談会のメンバーらが集い、受賞者の栄誉を祝福した。来賓として日本放送協会の上田良一会長、日本民間放送連盟の脇阪聰史副会長、ニッポン放送の重村一会長が登壇し、祝辞を述べた。



日本民間放送連盟副会長・脇阪聰史氏



日本放送協会会長・上田良一氏



ニッポン放送会長・重村 一氏

マイベストTV賞グランプリ

TBSテレビ
日曜劇場「陸王」

話題のドラマが今回のマイベストTV賞グランプリに輝いた。池井戸潤原作ドラマが支持される理由について、プロデューサーの伊與田英徳さんは「信じる人、正義の人が最後は勝つというストーリー」と話した。そして主演を務めた役所広司さんも登壇。役所さんにとっては15年ぶりの連ドラ主演だったが、「このドラマのチームはとても身近な感じで、(共演の)阿川佐和子さんともメールのやりとりをして、『ちゃんと話してきて』と言われてきました」と、素敵な笑顔を見せた。また、プレゼンターは視聴者を代表してオンライン会員Gメンバーの会社員・杉浦真紀さんが務めた。

志賀信夫賞

川端和治 BPO放送倫理・番組向上機構 放送倫理検証委員会前委員長



法のエキスパートとして、2007年に設置されたBPO放送倫理検証委員会の委員長を10年以上にわたって務め、放送倫理の仕組みを放送界に定着させることに貢献してきた川端さん。「こんな立派な賞をいただけるなんて、身に余る光栄です。放送倫理というのは現場の足かせではなく、その実践によって視聴者の信頼を勝ち取り、放送を不当な干渉から守る糧になると訴え続けてまいりました」。ゲストには、同委員会委員を務めた漫画家の里中満智子さんが駆けつけた。



CM部門

❖CM部門・優秀賞



日清食品ホールディングス **カップヌードル HUNGRY DAYS**
「予告篇」「魔女の宅急便篇」
高品質なアニメ作品。「カップヌードル」のブランドコンセプトはチャレンジ。常にユニークでとんがったCM作りを今後も続けていきます」(宣伝部係長・岡崎俊英さん)



ユーキャン **「One Month パパと息子の1ヶ月のふたり暮らし」**
一人息子の「れん君」と育休を取ったパパとのふれあいが感動的な180秒CM。「本物の親子だからこそ伝わるものがあつたと思います」(コーポレートコミュニケーション部部長・柳沢雅志さん)



大日本除虫菊 **金鳥少年2017シリーズ** 初のラジオCM優秀賞。関西弁の言い回しを生かした甘酸っぱい青春エピソード。「ひょっとしたら(賞を)いただけるんじゃないかと思っていました」(電通関西支社クリエイティブディレクター・直川隆久さん)



❖CM部門・大賞

資生堂ジャパン **表情プロジェクト** シリーズ「表情プロジェクト」女性のしわの改善を「自由な表情の獲得」という次元で捉え直し、日本を代表する6人の女優による美しい表情の輝きを見せることで、資生堂らしい視点とメッセージ力が存分に発揮された逸品。「しわを改善したいという願望の奥にあるお客さまのベネフィットを追求した結果の表現です」(メディア統括部長・小出誠さん)

報道活動部門

❖報道活動部門・大賞



名古屋テレビ放送

変わる自衛隊 地方から伝えた一連の報道

2014年7月、集団的自衛権の行使を容認する政府の閣議決定をきっかけとして、地元・東海地区の関連施設や訓練、隊員の家族など、「自衛隊はどう変わるのか」という視点の継続取材を行ってきた。「かなりハードルの高い取材対象でしたが、専門記者を置いて粘り強く交渉することで、継続していくことができました」(ニュース情報センター編集長・大塚敏郎さん)

❖報道活動部門・優秀賞



長崎ケーブルメディア **かえる先生のいきもの交遊録** 長崎在住の生物研究者である「かえる先生」による、環境問題というテーマを問いかける“動く生物図鑑”シリーズ。「私は五島列島の出身で、長崎の豊かな自然に囲まれて育ちました。大好きな動物を相手に番組が作れて幸せです」(放送部ディレクター・平山穂乃香さん)



日本放送協会 **相模原障害者施設殺傷事件後の一連の報道活動** 「ハートネットTV」制作チームによる、世の中を震撼させた事件のその後。被害者は匿名のまま記者発表された。その背景にあるものとは何か。「事件から2年、障害者に対する偏見や差別はなくなっていない。まだまだ追い続けなければいけないと思います」(アナウンサー・中野淳さん)

❖テレビ部門特別賞・受賞者バカリズムさんは欠席。会場にはビデオメッセージが届けられ、評価を受けた出演番組への感謝などが語られた。